

編集後記

国立病院機構東京病院 永井 英明

私は1984年に国立療養所（現：国立病院機構）東京病院に赴任したが、当時の東京病院の老朽化は激しく、廊下のリノリウムは剥げており、窓ガラスはかけているところもあり、病室の天井の一部に穴が開いてもいた。えらいところに来てしまったという思いもあったが、結核を中心とする呼吸器疾患の総本山でもあり、毎日が興味深い症例との出会いで張り合いがあった。当時の結核病棟は、20～30人の患者さんの受け持ちになっても週に1回ほど顔をみれば大丈夫というように病状の落ち着いた若い人が多かった。ところが、今や結核患者さんの大部分は高齢で、しかも合併症を抱えている方が多く、結核病棟の忙しさは一般病棟並みかそれ以上である。四半世紀の間にこれほどの変化である。しかし、この間、新たな試みとしてはDOTやIGRAによる診断などがあるが、結核医療におけるほとんどは先達が作り上げたものを踏襲しているにすぎなかった。過去のすばらしい業績が現在の結核医療を支えているのである。したがって、この特集号を読むことは、わが国の優れた業績を振り返るだけでなく、現在の結核医療を進めるうえでそのまま役に立つであろう。

今回私は、結核病学会誌「結核」第1巻第1号の巻頭を飾った北里柴三郎先生の「創刊の辞」（旧字体・カナ書き）を現在の文字に直す作業を行った。コッホが結核菌を発見するに至った過程が詳しく書いてあり、他のノーベル賞受賞者と同じように画期的な発見は偶然から見つかるものだと思つづく。また偉大な病理学者であるウィルヒョウとの確執はたいへん興味深かった。コッホだけを「先生」と呼称している文章を読み、あらためて北里先生がコッホを師と仰ぎ、両者が強い絆で結びついていることがよく理解できた。

編集に参加し、北里先生がわが国の結核医療を立ち上げ、受け継いだ人々がさらにそれを発展させ、われわれはその末端でたくさんの業績を利用させていただいていることを強く感じた次第である。